



# 技術史教育

第134号

2023.5.15

Education for History of Technology

## 第134号目次

- 日本技術史教育学会2023年度総会・研究発表講演会の開催に寄せて……柴崎年彦(1)  
 日本技術史教育学会2023年度総会・研究発表講演会開催案内……柴崎年彦(2)  
 「関西支部2022年度(通算第20回)総会・研究発表講演会」開催報告……南 正晴(3)  
 お知らせ・理事会議事録・編集後記 …… (4)

## 【総会案内】

## 日本技術史教育学会2023年度総会・研究発表会の開催に寄せて



### 2023年度総会・研究発表講演会実行委員会 実行委員長 柴崎 年彦(都立産技高専)

新型コロナウイルス感染症が5月の連休明けに5類に移行し、一つ扉が開いた感じとなりました。

今年度の総会・研究発表会はサレジオ高専を引き継ぎまして、東京都立産業技術高等専門学校(産技高専)の品川キャンパス(品川 CP)が会場校となり、対面を主としたリアル開催を予定しております。

産技高専は、南千住の都立航空高専、鮫洲の都立工業高専が平成18年度に統合・再編され、我が国で初めて2キャンパス1高専として開校した高専です。

このうち会場校の品川 CP の歴史は古く、戦前、昭和10年開設の東京府立電機工業学校、及び昭和15年開設の府立高等工業学校(後の都立工業専門学校)に遡ります。その後、戦後の学制改革により他の都立専門学校と共に東京都立大学工学部に統合され、工業学校は都立鮫洲新制高等学校(後の都立大学附属工業高等)として再発足しました。さらに、昭和29年都立工業短期大学が開設され、工業高校は32年から同短大の附属工業高等学校となり、昭和36年学校教育法の一部改正により高等専門学校制度が創設されると、昭和37年3月に短大附属工業高等学校の全日制を廃し、4月にそれを母体として前身校の都立工業高専が国立高専の第1期12校と同時に開設されました。この時、高校2、3年生を全員編入としましたので、2年後の昭和40年3月には、全国高専ではいち早く卒業生を輩出したとのことでした。

品川 CP のグラウンド側の階段を登って2階の入口を入ると中央ホール前の正面に『音面道』と大きく書かれた立派な銘板がかかっています。そこには、「旧制府立高等工業学校発祥の地」と題し、『音(おと)面(つら)道(みち)』という独創的な教育理念を掲げた校長清家正先生の薫陶のもと、工業社会における有為な技術者になるために切磋琢磨した』と記されています。清家正先生は、前身校の初代校長で、戦前の技術者教育に大きな足跡を残された先生です。諸先輩方からはこの言葉につい

て、「技術者は自分の耳で音を聞き、自分の目で物を見て、自分の手で触って判断することが大切だ」ということだと教わりました。

私は玉川大学の出身で、本学会を創った前田清志先生は、大学時代の部活、児童文学研究部の顧問でした。前田先生は幼稚園を除く、小学校、中学校、高校、大学の全ての学校で教鞭を執られ、また文学活動では日本児童文学という雑誌に童話作家の立原えりかさんのデビュー作と並んで作品が掲載され、さらにご専門の水車の研究ではHNKの教育番組に出演されるなど、幅広い活躍をされている先生でした。先生は「芸術や文学は個人が築いた山だが、科学や工学は先人の積み上げの上に山を築くようなもので、技術の歴史をきちんと学ぶことはとても大切なのだ」とよく言っていました。当時、先生は機械工学科で私は電子工学科の学生でしたが、部活が縁で、大学院に残って研究を続けることになったとき、「一つの分野だけでなく、傍にもう一つある方が良い」とおっしゃって、産業考古学会に誘っていただき、また本会に籍を置くように言われました。その後、都立工業高専に勤めることとなり、赴任するときに「お前の行く高専には技術史の授業があり珍しい」と喜んでおられました。産技高専となり、カリキュラムは何度も見直され、現在では専攻科の基礎科目に「科学技術史」が残っているのみとなりました。高専で助手として教えはじめた時、「習うより慣れ」と先輩の教官が学生に口癖のように言っておりましたが、まさに「音面道」で「体で覚えろ」という技術教育の真髄といった感じでした。本校では「体で覚えろ」が脈々と継承されていますが、前田先生の「傍にもう一つあった方が良い」という傍は、「技術史教育」なのかも知れません。

城南鮫洲は都立の工業教育の発祥の地という先輩方が多くおられます。今回、この鮫洲で、総会・研究発表会のお手伝いができること、何かのご縁と思い、嬉しく思っております。